2018 年 10 月 10 日

～毎月 10 日は人権を考える日～

虚しい比較

ダイアナ・マリー・リントン
（西条市地域振興課国際交流員）

異文化理解を深めるために、そして異なる国籍、民族、文化、背景を持つ人とのコミュニケーションを上手く進めるために欠かせないことの一つをお伝えしたいと思います。それは「人の痛みを比べるものではない」ということです。

苦しんでいる時に、人はその痛みについて言葉にできないものです。心に秘めた痛みや悲しみを口にした途端、現実に苦しみがより顕在化するのではないでしょうか。言葉は負の感情に力を与えがちです。ですから、痛みを他人から隠す傾向があると思います。もし誰かが痛みについて素直に話をしたら、それほどあなたを信頼できるという証拠なのです。しかし、信頼しているのに、相手がすぐに「でも、他の人の痛みに比べたら大したものではないですよ」と返したら、その瞬間に信頼が失われる上に、二人の間に壁がつくられます。そして、心の悩みを二度とその人には打ち明けたくないでしょう。

なぜ、私がこの話をしたいかというと、アメリカ社会で人種差別は私の人生に影響を与えるからです。両親の努力と愛情のおかげで恵まれた環境で育ちましたが、私も家族も人種差別から完全に守られていません。だから、親しくなればなるほど、いつか私は差別された経験や差別に関する社会問題について話すようになりました。一人で落ち込むよりは親しい友達と話して、癒されて、嫌な思いを半分にしたいと思う時もありました。別に自分がかわいそうだとは思っていませんが、信頼できる友達が、すぐに「黒人だけではなく、白人の民族の間にも差別があるよ」と言い、他の人種や民族の問題と比べ始める事もありました。同じような差別を一度も受けたことがなく、アメリカの奴隷と公民権運動の歴史とその歴史から生じた社会問題について勉強されていない方からこのような反応を聞いた途端、自分の心の中に壁をつくってしまいます。それは日々の生活を頑張るためなのです。

人の痛みを比べるのは、何の意味もありません。差別は様々ありますが、「誰の差別が一番ひどい」と聞いたとしてもそこからは何も生まれません。差別は比べるものではないと思います。むしろ、心が閉ざされてしまいます。「制度的差別によりどんな障がいが生まれ、それに対して何をすれば社会が改善されるのか」「精神的差別により起こるいじめ、暴力、疲れに対して、私たちのコミュニティ（地域社会等）は何をすればいいのか」等を聞くべきです。

そして、人権問題について皆さんに伝えたいと思っているなら、気になっている人権問題が他の人の差別や経験より大切だと考えないでください。認識すべきなのは、差別の「分類」や「程度や範囲」により優先することではなく、差別の「存在」に敢然と立ち向かわなければならないということです。差別を完全になくせないと言う人もいますが、諦めて何もしなくていいと思えるのは被差別の立場から考えたことがないからでしょう。
異文化理解を深めるために、他人の靴をはいて歩いてみましょう。

西条市人権教育協議会　　西条市教育委員会